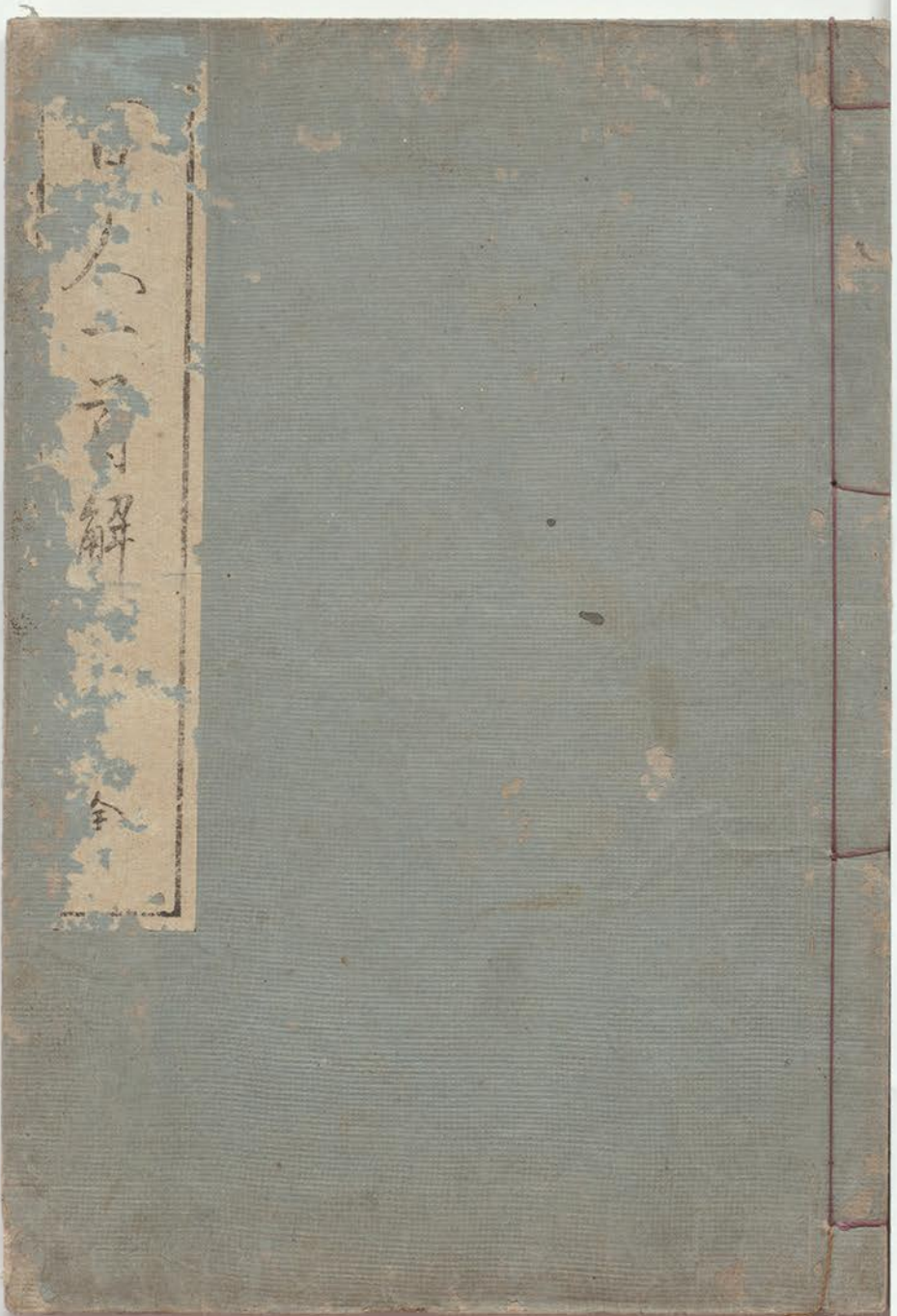




百人一首解序

嘉穂よりぬれやうのうゑ減中院
入道れもとてふにうゑ減中院
のうゑ減百人のうゑ減百人
一首と嘉穂よりぬれやうのうゑ減百人
のうゑ減百人のうゑ減百人
抄出よりぬれやうのうゑ減百人
のうゑ減百人のうゑ減百人

百人一首解序

嘉禎も一めれ水一ひも暖誠中院
入道れもとたひしる点板中細言を
ひを給ふ百人とれ色紙を後へ百人
一首と名にけりもさう奇しむ人農
師の筆にものさあやへふけり是れ
抄出さるぬれもさうあつとけり
玉乃みれいさるしれさるひも

乃思ふはものなほいふ人の心は
 ありては解るる事なりとて
 禁をもたずとていふ事なりとて
 うゝもいふ事なりとていふ事なりとて
 る事なりとていふ事なりとて
 ありては解るる事なりとて

後

百人一首解 序

人乃公をまじりていふ事なりとて
 魂をもたずとていふ事なりとて
 系のこゝたもいふ事なりとて
 乃いふ事なりとていふ事なりとて
 うゝもいふ事なりとていふ事なりとて
 家のつと人の心なりとていふ事なりとて
 いふ事なりとていふ事なりとて

けさまゝあゝあゝの百々乃平人の
そくある心もやゝ軒の志のよ乃
志れもさゝあや
あうゝ乃磨もさうたうさなれ
やゝれ夏源英暉近に國采も
乃里ゝゝゝゝゝ

天智天皇

題 後撰集秋

秋乃田のかき かつい
れこの庵乃智とあゝゝ
わりのあゝ乃庵乃智とあゝ
わりのあゝきなり

我 田と年 夜と袖 長き 露 いたく

ゆき 牙あゝあゝの
くきとあゝ

持統天皇

新古今集夏

栗本藏

是貞乃ここ

仁和帝弟二皇子右中將

の家乃秋合乃

平

古今集秋よみ人走つ

かく山

鹿の住みとさ

よ紅葉

の葉と

ゆきまけてたけ

なく麻の声

と

さう時を

く秋と

うかきき

ものいふてふた

中納言家持

歌

次

新古今集冬

かきき

鶴倭名加佐々本

のまをる

鳥麁橋〇宮中乃御膳よた

たろなり。鳥麁橋邊歌御膳とつ

にそく霜乃

あろきと

宿直に

えもむいた

あづけ

きふ

安倍仲磨

もろろ

仲まろと。もろろは物あうと。よつと。うき

月瓜

くくすめふ

古今集露旅

あま乃そ

あま乃そ。あま乃そ。あま乃そ。

ゆりさけ

振放見者。遠く見る。あま乃そ。あま乃そ。あま乃そ。

月

大和國係上郡。あま乃そ。

百人一首集

正

栗本藏

三笠の山 春日と 同所 に従ひ月うも 疑辭

喜撰法師

題志々次 古今集雜

つゝ庵をさやこ 平安城 のたつて にやう

あうと あうとむいへがこいもむいへが居て人にやうあ
辭とやういさまをたててういふもいふえよ 在

とらふ 山城國宇治郡。連と
うしといひなり といふなり といふ
なり

小野小町

題志々次 古今集春

花 櫻 乃色 はないろ うほり うろふもほり。
あのかたけなう に

かりか 歎辭 うろ きせ ぬ我身 わがみ 在 あ り

行 行ふ雨の
路とてなり なが 詠は森雨
とてなり 幾 や 間 花のうろふと
そくも然うら

のれうへゆらん東とちげくへ
あふれ女の情なり

蟬丸

香坂 近江國 の園 都とち近江路
物。乃園なり 又庵室

とほろりて 住ゆ たり ゆきう人
都人の
香坂の

園とて。東海東山の陸木の諸園
へいれむけ。彼来志げきなり とく 蟬丸を
商人とく

百人一首集

四

栗本藏

いづるものともおとなる。この詞書
みくもあふか 後撰集 雜

あまやこの 二つ物のあま **人** もうへる **人** も

わづれてい すま集あまはとあまどあまは
あまはとあまはとあまはとあまはと **人** あり **人**

もあふぬ **人** も ゆき あまの国 上一句下二句。あまの
といる名い。あれやこ

故也。と解
まゝなり

冬 議 篁

隠岐の國はあふれきる 續日本後紀
文德實錄ホ

に。篁流羅の
まゝなり 海ののりて 不難波
の津なりとて

系なる人 友の も は つうにきる 古今集 羈旅

け。乃 海原 たり わ へ あまの け く け も け 今

清 る ぬ 系 ぬ 系 ぬ 人 ぬ 花の色との。ととけく。あま
まはる。人。つぎとなり

つげよ 海色よりの使なれど。海さう
なぞく。物あにそとていり

僧正 遍 昭

五節 毎年十一月中の丑の日より
己下。四日の間行なり也 の 藤 原 良家乃
あ。いさど

嫁せぬと。さ
みくなり と あ け 右今集 雜

あま 雲の風ははるもの。あれど。
まゝなり 風 くもれか。い

ちと天女の通路 ふきとらよ とらめのかうぶき雲路と風の吹とらよ。五葉の露根とあまのいそめにかへてより

○雲上のおあれ とらめれとらよ とらめれとらよ

とらめ とらめれとらよ とらめれとらよ

陽成院

はりとの 六条の北東洞院 乃みこ 光孝天皇弟 二の皇女安子

内親王 はりとらよ 後撰集戀

はくと 常陸國筑波郡 のねとらよ のねとらよ

より はりとらよ 筑波嶺の藤原より 乃みこ

とらと 常陸國筑波郡 のねとらよ のねとらよ

河魚丸大長

題志く次 古今集戀

みられくの志のふ 隆興國 信夫郡 もじとら 信夫郡より

たてよと たてよとらよ 誰とら たてよとら

にと 集よとら 誰とら にとら

にと 集よとら 誰とら にとら

光孝天皇

仁和帝みこ 親王 はおろしけり

時ふ人よりふまゐる内平 古今集春

君 いみへへよ下 たた た らの野より

若菜 た つむ我 自 衣 袖 に雪より

ふりけり。ふれどもとりやはいし。飯を
ともいそむけふとつゝ給ひし。と

中絶言行平

いまはの守なりし が 文德實録云齊衡三年
正月丙申。從四位下在原

朝臣行平。為
因幡守 任そみやこれのありき

わがふ人 女ふ とも は 家集

まづ 因幡國は美郡 柳羽 乃 伊奈 山

ま ねは侍 こと 賜 辞 き け

今 た り それと 人 み け と け

在魚業平朝臣

二条后 清和天皇后。陽成院御母。○
贈大政大臣藤原長良公女高子 の東宮乃

ふ ふ け ふ け ふ け ふ け

新入一箇解

二

奥本蔵

立田河より紅糸ながれくるむとくまり
ありと影そよめふ 古今集秋

ちとわぶる 神といふ人との枕詞 神代 もきく次上二句下三句

そと河 大和國平群郡 かつく種なる 韓紅の錦なり

従水 つるふ い 紅糸と錦いさそよめくるむとくまり

藤原敏行朝臣

寛平のし時 宇多天皇の御宇 后宮 昭宣公女 乃奇

合の秋 古今集戀

住乃え 攝津國任吉郡 のるより は二句ハ序に

よふさへや あふまへて人目とつし 夏の あといふ人料なり

人 たふ 免 と とき 避らん あふまへてをあらふ

倅勢

新古今集戀

かたむく 根津國川邊郡 みづき さ 芦の

ゆ あーのゆーのまといふ みづきまゐるが中

も 不達 大乃 せう 老 よとそふ と さ

てよと
のふ
や
疑辭○は是を人とな
うらそよめるなを

元良親王

ちとゞき
蜜通の本やうなれて
 名のとゞきとあり
 のらふ京極

のふと所
女寝子
藤魚時平公
いつくま

王いぬは
 たるよといふ
 今

し
將ろん
名へ
ね
名へ
難波今とてい
な。

にわ
ふふふく
倭標○延喜式云。難波津頭海中立
倭標。若有旧標朽折者。搜出拔去。云

是水脉乃不。本と立をなく出入る水の流とある。一むあや
○身と盡一てもとせり。盡るるが次第。身となくてもよくなり

吹くくに 吹くくに 秋の草 や 木の葉のふも

とまかり むべ やま風を あ ありし 荒○嵐 山下出風也

倭名 阿良之 と い りふ に らん

大に千里

是貞のみこれ家の予合によめふ 古今集秋

月 と り秋むち い ぐに あ ちを い ぎ い くれ

我乃ひん の 秋 い へ あ ち い くれ の秋乃やんを色く

秋乃白秋来只為一人長とよ 白居易の詩にりぞたり

菅家

朱雀院 寛平 上皇 の あ ち 寧樂○大和國 添上郡 へ い くれ

は 御幸 ち あ ち い くれ 大和 添上郡 へ い くれ

此 い 度 い ち い くれ 院の庵使をい へ い くれ

あ い ち い くれ 倭よりあふせぬといふ へ い くれ

と い ち い くれ と登ふぬこの へ い くれ

と い ち い くれ と登ふぬこの へ い くれ

三條右大臣

百人一首集

ナ

源林蔵

らんかのもにつゝも 後撰集戀

名やせり 名坂のあつとくをよめども也。〇いざあゝとん都ちと

あふ坂山 近江國 のさ〇ろ 五味傳名作糸加豆良。〇

乃 あやぐりあり 人 あゝももぞ 乃 あゝももぞ 乃 あゝももぞ

も 俗いこと。其あねよりむるをよめ〇もかゝ願辭。〇うはとれたる

貞信公

亭子院 寛平 大井河 山城國 御寮 上皇より

ありて 延喜帝 行幸 今上より行幸とくより西宮抄

あやめきあかりとあやせうあはけは

奏 奏とんとよりし 拾遺集雜秋

と 大井川の東に庵あり 乃 あゝももぞ

あ あゝももぞ 乃 あゝももぞ

一 あゝももぞ 乃 あゝももぞ

中納言兼輔

是 是とんとよりし 乃 あゝももぞ

み みとんとよりし 乃 あゝももぞ

百人一首集

廿

東林藏

又くし その けられし さのよまひ。火よりまよひ。はれをねまふ火なり

今夜乃 曉さ さる ぐり る うき き の の いか い なを安の

帰るさるしもわかれどや。ひるぎん。はして是のあそむうさそまふべし

坂上是則

大和のふはうきりきり雪のゆり

けると又そよめふ 古今集冬

あき あけ け け あり あり 月 か と と 観

す す 野の 大和國 里 吉野郡 ふ ふ 雪

春道列樹

志賀 近江國 の 志賀郡 山越 北白河の麓の傍りのやうく。如意が嶺越。志賀へゆき道なり。

そ そ 今 古今集秋

山河 山河 乃 乃 川ありはよき本

桜さうして柴作や。とみつものなり は は あ あ ぬ ぬ とをせんとも

紀友則

櫻乃 古今集春 花 花 の の ち ち と と あり

久 久 の の いりといふ 枕詞 ち ち り り ね ね ぐ ぐ ま ま れ れ 小 小 いふ

雨 雨 八 八 節 節 解 解

世 世

集 集 林 林 藏 藏

○吾いむしふかろふあふべ中く
わうとあやほふふきふとあり
きふふふふふふふふふふふ
つり
梅乃 花 **むか** ぞむうーの **むか** 香に

しむしふ

清魚深養父

月乃あふふふふふふふふふふふ

ふふふ 古今集夏

夏の夜ふふふふふふ **初夜** ながうわけめふふ

雲乃いふふふふふふふふふふ **やぎふ** なく一ふふ

文屋朝康

延喜の内時あふふふふ **後撰集秋**

あふふふふふふふふふ **吹頻** 秋の夜ふふふ

あふふふふふふ **玉の緒** して貫たふ **とらり** をか

右近

あふふふふふふふふふふふ **大和物語**

あふふふふふふふふふふふ **大和物語**

あふふふふふふふふふふふ **大和物語**

あしきん

ちういて

人男

の命

あしきん乃

いゝやゝくもあつゝか歎辞

冬議等

人々はうききり

後撰集戀

あさぢふのと乃

は芽せ
小野

れ志のころ

志のぞといふ人
序の上二句

下二句○古今集よ人あつゝ
めとよあつゝとむうへき。又よ

志のふもど

い

あまわと

たじり

人のあつゝき

あつゝきといふもいふも。わにみえん
あつゝき。わにみえん。わにみえん。わにみえん。

とてあつゝきといふ。志のふといふ。人
のあつゝきといふ。わにみえん。わにみえん。

平兼盛

天曆

村上帝の
年号

御時奇合

拾遺集戀

志のふ

志のふ

志のふといふ。志のふといふ。志のふといふ。志のふといふ。

あつゝき人のあつゝき

壬生忠見

天曆時奇合

拾遺集戀

志のふ

志のふといふ。志のふといふ。志のふといふ。志のふといふ。

まじき速

たつゝき

上二句
下二句

人志のふといふ。人志のふといふ。人志のふといふ。人志のふといふ。

ひとめーが 下より上へサスー

清魚え輔

ふかより 他にうよりて 後拾遺集

ちきりき けで 歎録○上一句 下四句 かに 互に袖とさふ

〇 下より 末のね 陰奥國のあづみとわたりて 末のねあみもくみんよめる

と引く 下より なみ 下より 歎録○へサス 一とる 體

權中訖言敦忠

と 古今六帖雜思

あいての後朝のあろ あいての

今の あいての ひ きつ 中 ものとあも

さ さ さ

中訖言朝忠

天曆 拾遺集戀

あ あ あ あ

く 俗はくく あ あ あ

謙徳公

ものいひゆるるらんかの。後、はるかに
てさうにわさふゆりまたむ。拾遺集戀

あまれといふべき人女いひもやそで。わがくちがし
○よりや吾を死をもも。あまれど。たの五。いづら。むかひさ。○定まら

死のま。になりぬ。ふへきか。歎辭

曾祿好忠

題。あゝ。新古今集戀

由良。丹後國。の門をわさる舟人の。梶。橋樞の類を
文謝郡。てつらと訓で

とてえ。断絶。ゆるる。ゆく来もきぬ。とて

急。ゆるる。ゆく来もきぬ。とて。乃ちちうか

惠慶法師

河魚院。左大臣融公の住。して荒るる宿。秋

来。よ。あ。と。人。い。ゆ。り。乃。さ。い。き。ん

八才。津。志。々。い。や。と。乃。さ。い。き。ん

人。ち。と。い。れ。秋。い。き。ん。り。人。ち。と。い。れ。秋。い。き。ん。り

漁重之

冷泉院東宮とよき時。百首の寄

なりきるよふ
詞花集

風

風のつよき也。管と
あゝみのみのぶじ

思ふふれ

上三句ハ序

とのおかしこ
人いふふ
うたな也
うけくおを
きりしる

大中於能宣朝臣

題

詞苑集戀

みきより諸士のたふし乃

宮衛令

上二句々序○
云其宮門皆令衛士

炬火

よる

いづれの鬼

七

人
乙

七

五

13

物とちを
み

藤
魚
義
孝

人を許すはなりき
戀 後拾遺集

君女がたあ

ふんきり
ふんきり

ね
く
あ

ら

12

五
令

今四
よる

なぐもろ

願辭

乙
七
五
三
一

うゝ、歎辭の通うかゝと非のいともある命乃
抑きとある。康義公の奇へゆくわのゝ處よげの

藤原實方

女メ子コ子シ子ス子セ子ソ子タ子チ子ツ子テ子ト
後拾遺集戀

かく

さわいひき

下野國伊吹山あり

○詠みいひし

乃さーをくさ

上二句ハ序の體ふらりし

の畧語にて。余は月ふあふた

さーもさー

ちもゆるみ

みりんと火をとて。みり

孫原道信朝也

さんかのもみまうりやあゝあー

につうとーもみ

家集

あきあきい

俗よれども
とよまほし
うらめしきあさあらしうか

右近大將道綱母

十月晦日くさるる夜

攝政兼家公

又さねあけり

さへ

道綱母の

兼家公

めりしとみり

かきしつゝあなうを

外の

家とみけき

ものーなり

翌朝

あゝもあじと

蛸蛉日記

いん いんむり
久き物と云
サ
ある 門のくさ
まれちじ

をぶ。遅うとてかへやどりやまふ。いく夜さう暮まふて。ひとりぬる夜の
あくるまの夕へきながげきとちひるせふとあり。○情陰記の道綱の母の日記也

儀同之司母

申の関白道隆公
かしこめたりきり
戀新古今集

[illegible]

今のをさくしと
 地りいれ死ん
 々ふとひきりの
 命をうけ
 五

大納言公任

嵯峨の大覺寺
山城園葛野郡○そのうみ
嵯峨天皇の御くまざりなり

はろてあまう種哥とくろにふみ

竹久 千載集雜

大覺寺にありて滝也。○
今も此滝殿のわくに
乃音ハ
今
すゝゝゝゝ
はこれと云ふ龍殿の
たつとも強りあり

久しくありやと
名を
とてとてとてと
意未あり。竟乃音た

あつて今きゐれ

和泉式部

あち例なほはゆりきり人あのもの

つらき後拾遺集戀

あさらんけ世まの外あ乃あゆい

今いのあいとうもあゆい

紫式部

さあくあゆいあゆいあゆい

きり人のあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆい

大蔵三佐

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ああゆいあゆいあゆいあゆい

ありま根津國カ有馬郡カ河邊郡は女の風

男男のあけ男のさ男のい男のと男のよ男の

ささ人人ととああすす

人人ののささいいすす

皆皆ののささいいすす

赤染

中国中国ののああわわいいすす

ままいい馬馬内内侍侍ををいいすす

ききたたののああわわいいすす

聖朝聖朝如如馬馬内内侍侍ににいいすす

ややいいすすたたののああわわいいすす

ささいいすすたたののああわわいいすす

小式部内侍

和泉式部小式部の母保昌保昌妻藤原氏にに奥奥にに

丹後國丹後守によりより都都にに

新合新合ののああわわいいすす

ち〜ねく平八郎の方人乃ゆりもろと。中

納々定頼。房の〜い〜と見く。平ハ

いうせき。芳のふ。丹後ハ人ほろ〜

もんや。ほろい〜まうでさ〜や。いうん

も〜も〜め〜も〜んな〜。ふ〜も〜

ま〜かと小式部が平ハ。母の。ね泉武部のよ〜て得
さ〜れど。よきを〜いふ。あめあ〜ん

それとふ〜も〜。かの母の在る。丹後ハ人ほろ〜て。〜と
平と得るやと。定頼ハ乃あづりいつふなを。〜と

めてよめふ。金葉集雜

大い〜丹波路乃
いりり也幾野丹波の
ゆき也の道の遠々〜

ゆ〜踏
文も〜も〜天のさ〜とぞ丹後國と謝郡。
當意即妙

伊勢大輔

一乘院ハ時。あらのハなざ〜と人乃

ま〜ま〜とさ〜めりハ。あ〜ゆ〜れ〜。あ〜と

野〜と平〜と作〜とありきれ〜詞義集看

い〜の〜れ都元明天皇と光仁帝
す七代の都也のハま〜

今ぬ九ま内裏○あのかのいもよあり○離騷曰君門
さ九重のハまより九ま〜け〜

きく ふづく下紐の
くさくさといふ

大京大夫道雅

伊勢れお宮にうりよものありてけり

きる人 三條院第一皇女。
常にお教王のまへ は志のひそかにしる

あとし け茶飯宮に密通の事。榮花おぼろしくかけを
○い集は飯宮にうりて書いけり世の撰集されし也

おやけもきあやめてまもりぬ まもり人へ
○あつけぬ

いふもの いふもの なづつけさせまいて思ひぬ あたまに
をすべし

なりにけれをよみけり 後拾遺集

今いふ あま いたる人 不詮。あま
けしむ也 と いふ

ばり たふ
さあて と人づかな いふ も いふ か

権中納言定頼

宇治はうりてけり 千載集冬

朝 あ け 上二句
下四句 宇治の川 宇治のわたりへふ川の
氣ぬけむ。秋に

ぬ も終焉
ぬ の た くに いふ
いふ あ いふ くれ 見
いふ

瀬 いふ け いふ ろ いふ 本 細代本へ。本とあふて。横本とまじ
とふは實とて。あふにむかふ人乃

床 ともいふ。かぐり火とたきそ。ゆ更とさる具也
○万葉集。八十氏河乃。阿白本尔

相模

永泰六年

後冷泉院
年号

内裏平合

後拾遺集戀

うみ

つぎあはれ人と

和
方
名

神

あるものと云ふ朽き人なりと

了その手紙に於て
茶は久しむて見よ

和之

わさるゝ急降よ。名と
くさんちととりよ

大僧正行

大

吉野郡

王の世に於ては

乃嘆々りたるを以て

花々んともゆりぐさの峯
入るにむ。ゆりぐさの峯

書り
よめる
金葉集雜

もろもろ

吾也

あまねと共々山櫻花

よりかゝる志を

いゝやどにきそるねの本女と
ふれを昔の人と相ふるやうとし

也

名もあつぬ。よは木のてなれを吾ハ橋の花のてある人なり。花も其てこを
ある人と知りてあはれをとりつとを以てをれと知りといひ。○自負するまじに

周防內侍

きさき^ひき^ふばり月乃あきと夜二条院

二系南東洞院東。道長公
造之。二系関白傳領

有从一首解

七七

藥林藏

居あつて。物さうなうきさう
周防内侍よりふく。枕をか那
枕乃あけりしと
しるなりや志のびやういよと同く
大納言忠家。ちねを枕うきさ
かいか耐とみま。翠簾の志よりじ
いまでゆりきたむさう付くる 千載集雜
まね東乃美さうり 程あり
春の東乃みど
うきといふも枕よ
かいたく いふさうといふれきさ
やうさうとよせりるん急をせられ

三条院

例あつてねはしまして。佐なさんおが
めさう いふさうといふれきさ
やうさうとよせりるん急をせられ

いふさうといふれきさ
やうさうとよせり
宮中の月の名残と
よみさうなり

能因法師

永義四年内裏寄合後拾遺集秋

あじやうこむろの山大和國
う市郡れもさちひさ

そこの川乃ありきなりきり

良選法師

野——うふ後拾遺集秋

さび——に宿とまむなうむさむえま
せ

いづくもみほし秋の夕ぐせ

大細言經信

師賢朝長源氏○冬議
資通子の梅津山城國
葛野郡の山里

いづまかりて田家秋風といへるあふ

よあふ金葉集秋

夕さ秋たむるを田門乃希
ある田といふの稲葉秋と

づききてやあしれまろや題の田家
とてんは秋風ぞふく

祐子内親王家紀伊

堀河院中時勢書合内して殿上の人寄しむ
きこゆるにまつ人の

もこれけうれ寄しむ
やれとわかせまうふよあふ中細言俊忠

人をもあまのいなりをせう

越中國の名所也。たゞし名所あり

いへていへり。たゞし名所あり。たゞし名所あり。たゞし名所あり。

けしきとみそくへー 金葉集戀

音ひきくたりの涙

和泉國 大寺郡

乃あふかき

男といふふかはけしや

いけり。いけり。いけり。

袖のぬき

もあをすも

いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。

いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。

権中納言匡房

うちのあかいまうらき

四大臣○後二条 奥白師通公

乃

蘇

家七人ゝ酒さるべし

○

遠は山標とていふあらとよめる

後拾遺集春

たうさ

山の

乃標さきにさう外

いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。いへていへり。

れうもみそげもあら

かん

下知辭○よのつひ。尾上もよく又ゆるかれど。いへていへり。いへていへり。いへていへり。

源俊頼朝片

権中納言俊忠家一志十首

くつ新不意と云ふを 千載集意

うかりき人 いのれどく と云ふせ 幼少よきと云ふこと

る六帖の字より わじにけい 乃ふぬら なづら

いふべきと いふん 乃ふぬら なづら 乃ふぬら なづら

流布の本 いふん 乃ふぬら なづら 乃ふぬら なづら

かくあ いふ 乃ふぬら なづら 乃ふぬら なづら

藤原基俊

僧都光覺

基俊の男。奥福寺の僧。権僧都

維摩會

十月十四日

との間。奥福寺 乃講師の請 講師乃請と云ふは僧ハ

は性寺入道大政大臣 忠道公

うみ 奥福寺ハ藤原家の寺なり

あ 講師ハ藤原氏乃長者の

あ 下野國

又 乃性寺ハ

千載集雜

ちきり

志めざがむと
製うくときあに

上
 上も茶の土せも
 上も茶の土せも
 上

乃上せり

と命
ゑたの
にて

て
も
な
く
あ
い
れ

あじの秋もいねゆく○秋もあり

十月よとてふとてふとてふ
はく秋の内より講師

のさめあふゆ其定は
たふきぬたむかくり

清性寺入乃希関白大政大臣

新院 崇德院

佐々木氏は一時海上遠

聖

あふひあふひ彫望とひきつゝなり。こひととよのよとせ
本集に遠望とあるを。あまたなり

まゐるよめか
詞苑集雜

五ノ原
を以舟

大正

むふ
れ
む^{oo}
久
さ
め

電といふん
枕詞

香野小まゝにねるゝをうたふ

山宗德院

題詞次

瀬をよりやう
さわかき瀬より〇風を
 つみとりさみのおとし
 史せうを滝川

の序へ
王様も
末に
あんな
やう

漁兼昌

閑路千鳥といふとよめり 金葉集冬

あたらし鴻淡路國かよふ千鳥のなく声い

茶あ床ざめぬくらての閑橋津守とみ

きいひくるあたら
鴻とよめり

たふ大夫顯輔

宗徳院一首首れ寄なりきり新古今集秋

秋風よきまじくならぬ雲のふくはよ

もと出る月のうき乃さやけさ

待賢門院堀河

百首れ寄なりきり時態乃あふんと

よめふ 千載集戀

なあらんのかもちはる上果下媛乃

けが髪のななくてふのかいくく髪のふくいふあかい

みどきもちくばいくくけくみくととへり

け後朝はのととみり

後徳大寺大后
曉聞郭公といふを讀ゆり 千載集夏

あきぎに啼つるをたぐひてたわり
めの月うねるを

道因法師

題より次千載集戀

あきぎに啼つるをたぐひてたわり
めの月うねるを
皇太后宮大夫俊成

述懷百首乃哥よみ侍るとき廉の哥

とてよめふ千載集雜

世の中よ道あそなれ
あきぎに啼つるをたぐひてたわり

あきぎに啼つるをたぐひてたわり
あきぎに啼つるをたぐひてたわり

あきぎに啼つるをたぐひてたわり

藤原清輔朝臣

疑志より新古今集雜

ながくへいすこけとや
あきぎに啼つるをたぐひてたわり

あきぎに啼つるをたぐひてたわり
あきぎに啼つるをたぐひてたわり

後恵法師

戀れうゝとてよめぬ 千載集恋

よもろ

つとまき人ゆゑ
月もわづか

おやりよひ

つとまき人
のうゑ

上二句
下三句

わけやぬ国のらよ

国のらよあゝも
とまのま

えん

といふまゝ。つとまき人のみ。
国乃らよほぐも也

つとま

あゝくめ
やま

西村法師

月茶恋といふあゝと寝る 千載集恋

たげとて月やいねを思ふ

月ひ秋まげとて

寂蓮法師

五十首寄なりし時 新古今集秋

ひさめ

あゝあゝ
あゝあゝ

おろも

あゝあゝ
あゝあゝ

やが 真本

あゝあゝ
あゝあゝ

のやうき

あゝあゝ
あゝあゝ

秋乃夕くれ

あゝあゝ
あゝあゝ

白王嘉門院別當

根政

法性寺

大正の時代、旅宿

逢憲といふたふとよあふ

千載集憲

なほ

題の旅宿

あしけう膝ひざ斯かと云いふ乃

二

夜に廿
ととと

戸の節に

人^に身とほくし
標^{ひょう}にやせ

下を云々入

一夜の契乃
せんちとよ

式子内款五

而首身中以忍戀々新古今集戀

玉の緒命

よき

緒とらふ
乃とせあり

上二句

下之
句

人々あるをよそ

てよきに
あふれ

もせんといふなり。○此齊ハ吾意の人ぶかくもむいひぬ
しとて、さで志の意之。されむかへ、身のおゆるびよあそ

とんちもあがつうかたれた。さあならぬ
やうな。命のあつねりもよめるな

殷富門院大輔

哥合一ゆりも耐えの哥とて強る 千載伝本

忍々DOやあ

上一句
下四句

雄鴻陸奥乃海人乃

やまが破る
せよとあるに

[illegible]

ゆき

群とゆきとゆき
車の比よきとよ

ゆき

いけ

ゆき

こゝ血の洞、袖の色のいさとつゝ
等乃よめる新あり○周易韓非子
詰あり○ゆきとる袖をほとちき人の
又せむやふと下よる後句へ入るる群

ゆき

いけ

後京極格改前大臣改大臣

百首新集一時

新古今集秋

きり

群○俗
こゝろぎとよ

きり

鳴

きり

さむ

こゝろぎとよ

さむ

きり

さむ

い

米の人唐の矛の指句の指也
○秋葉長乃意

い

きり

い

二條院讃岐

寄石戀といふあゝと千載集戀

わが

袖ハ上ハ句
下ハ句

わが

わが

わが

く

人ハ上ハ句
下ハ句

く

く

く

鎌倉右大臣

題名

新勅撰集羈旅

在の

常丹毛葉名○不愛にもあれ
がと形ハ群也○上二句下二句

在の

在の

在の

な

満ちあふれなふね乃
舟に綱つけ
て川と

な

な

な

多

物のつゝを煮ぬゝむをいづ。○かきさ凍ゆゝ小舟に
綱うらゝくひくあまねをさど。いとくやとせうんやら

あいつは、公の位やでなくせに、幸ひ私をたのこさぬと云ふ。さうした
らば、その人になんかきくもなべての人情はいまもかくある。

矢議雅經

壽衣

新の衣巻のけちを

新古今集社

みよしの

眞一野といふ雪
と天をいふ人

の秋風さよ

子方

風のふくと故に

ありしをあれは。後くゝんきんてゝや。

よ 故
あ り

多々あるなり

友與かとのちうきふりしや
よめるい都く妙きうげ

大僧正慈圖

翠

しんあ

千載集雜

あけく

俗より大膽なる
と云ふが如く

うき世のうき
民衆

松屋

後漢書女工之業覆衣
天下○上三句下二句

我立村。

北嶺山の傳教
大師の平す也

我之根に黒くぬす

○けふは夜とくけりての残まのうゝ

すゝそふ民の安穩と
いのちを身におもふと

入道恭大政大臣

落石とよみ侍る

新勅撰集雜

花

さるる風の疾乃雪

あ
ら

百八十一番解

カ

果本集

おのへに北條家園政とほきなりて終る遠きうつれを
あやめおとくをたのめらきなりやぬおのいふあつてなり

を
おのふなり
いひ残る
手本於葉

順徳院

題あつて 續後撰集雜

百しき 四裏と やふき 軒端 玉さけけし宮中乃
ゆるき軒端となりふ

あふあふとせし言と設て の志のふ 茶のこも
あつて茶の名なり

いひ かくあふり いづるむう かなきり 此帝も
父帝と

おのじいさなり
あつてなり也

寶曆六丙子乃

栗本英暉解

東情書報中林堂 餘草堂市

百八十一卷

罕

栗本藏

東都書肆申椒堂須原屋市兵衛梓

明和八年辛卯七月



1001974425

書名 百人一首解
著者名 栗原英輝
購入日 昭和10年10月23日
代価 1.20
蔵入室 (1754222)
田野 徳田書院

明和八年辛卯七月

東都書肆申松堂須原屋市兵衛梓



